

総合表現（オペレッタ）における自己評価チェック項目の選定

入江 慶太, 尾崎 公彦, 青井 則子, 秋政 邦江

Selection of Self-Evaluation Items for the Class of Operetta

Keita IRIE, Kimihiko OZAKI, Noriko AOI and Kunie AKIMASA

キーワード：総合表現, オペレッタ, 自己評価, 振り返り

概 要

本研究の目的は、総合表現（オペレッタ）において、自らの作品発表を客観的に振り返るための自己評価チェック項目を選定することである。

過去3年間の自己評価チェックシートの分析の結果、学生は第三者にどのように見えているかという「観る側の視点」まで十分に到達できずに、自らのイメージを具体的にどう表現するかという段階（創る側の視点）に留まっていること、教員提示のカテゴリが「創る側の視点」に偏っていることが明らかとなり、両者を改善する必要性が示唆された。

以上のことを踏まえ、4カテゴリ12チェック項目「コミュニケーション（双方向の話し合い・情報共有・他者理解）」「備品・施設の使用（正しい使用・決まりごとの順守・利用時の他者への配慮）」「制作上の工夫（効果的な指導の取り入れ・テーマの表現・表現分野の工夫）」「省察（既有知識の活用・客観的視点の保持・自己表現）」を自己評価チェック項目として選定した。

1. 緒 言

本研究の目的は、総合表現（オペレッタ）において、自らの作品発表を客観的に振り返るための自己評価チェック項目を選定することである。

本学科の総合表現（オペレッタ）は、保育者として必要な身体表現・音楽表現・造形表現・言語表現が一体となって展開されるものとして位置づけており、子どもを対象にしたテーマを設定して制作するものとしている。このオペレッタ制作を行う教育的意義は大別して2つある。1つ目は、これまでに習得してきた表現技術の再確認とブラッシュアップを行うと同時に、イメージを具現化するために複数の表現技術を組み合わせる作業を行うことである。普段、表現技術に関する授業は別々に開講されているため、学生にとってオペレッタ制作は個々の表現技術をまさに「総合的」に駆使していく機会となるのである。2つ目は、オペレッタ制作を通して、協調性や他者理解、自主性、自己

制御、コミュニケーション力など、保育者として、また社会人として必要な対人スキルを身につける体験の場となることである。人間関係の希薄さ、受動的態度、対話する力の不足などが問題となっている現代の学生にとって、オペレッタ制作を行うことの意味は非常に大きいと考える。

これらの教育的意義が達成されたかどうかは、複数の担当教員による評価とともに、学生自身が客観的に自らの作品やその制作過程を振り返ることが大切になってくる。特に、保育者を目指す本学科の学生にとって、客観的に自らの取り組みを振り返る力は保育のPDCAサイクルに資する力を身につけるという意味でも重要になってくる。一方で、オペレッタ制作は、舞台上で上演するという目標に向かって、一定の期間、同じグループメンバーがイメージを共有し、協同して制作活動を行っていく。その過程の一つ一つが学生の主体的な取り組みとなるため、上演後の学生の振り返りは「120%の力を出し切った」「本番に最高の演技ができた」「協力して制作することができた」といった自己満足・自己完結型の主観的な振り返りに陥りやすい傾向がある。

それを打開するため、平成21年度の総合表現（オペ

（平成24年11月19日受理）

川崎医療短期大学 医療保育科

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

レッタ)の授業から、自己評価チェックシートを導入している。伊藤ら¹⁾によれば、この自己評価チェックシートは、授業の目的と達成課題を踏まえた5つのカテゴリ(コミュニケーション・備品の使用・施設の使用・制作上の工夫・その他)を教員から提示し、カテゴリ毎に2つの「チェック項目」を学生が自由に設定する様式となっている。学生自らが「チェック項目」を設定することにより、学生がオペレッタ制作において感じていた思いや関心を浮き彫りすることができ、特に人間関係力や問題解決力の意識の高さを確認することができた。一方で、学生が設定する「チェック項目」は自らが経験したこと限定されるため、自らの作品やその制作過程をさまざまな視点から客観的に振り返ることが難しいという課題も明らかになった。

また、オペレッタの制作過程には、自らの考え・イメージを具体的にどう表現するかという「創る側の視点」と、伝えたいことが第三者にどのように見えるかに重点を置く「観る側の視点」の2つの視点がある¹⁾。つまり、それぞれの視点から作品を振り返ることができれば、学生の振り返りの客観性は高まることが予測される。しかし、先述の伊藤らによれば、学生の回答は「創る側の視点」に終始し、「観る側の視点」が極端に少なかったことが示唆された。したがって、「観る側の視点」に学生の意識が向くような項目を新たに提示する必要があると考えられる。

そこで本研究では、まず、過去3ヵ年(平成21年度～23年度)に実施した自己評価チェックシートの回答を集計・精査し、「創る側の視点」と「観る側の視点」の回答数の現状を把握し、分析を行う。その分析結果を踏まえた上で、5つのカテゴリ毎に学生の回答を同じ意味のまとまりに集計し、学生が自らの作品発表を客観的に振り返るための自己評価チェック項目を選定することを目的とする。

2. 方 法

1) 分析対象

平成21年度～23年度に総合表現(オペレッタ)を受講した3～5期生196名(3期生68名、4期生61名、5期生67名)がそれぞれ所属した15グループ(各年度5グループあり、1グループ12～14名で構成)の自己評価チェックシートを対象とした。これは、自己評価チェックシート作成の実施をグループごとに行ったためである。自己評価チェックシートの回収率は、97.5%(196名中191名が回答)であった。

なお、自己評価チェックシートの作成に取り掛かる前に、学生には自己評価チェックシートから得られる情報は研究目的に使用されることがあり、それ以外に使用されないこと、また、回答者が特定されることはないことを説明し、本人の同意を得て無記名で実施した。

2) 分析方法

実施した自己評価チェックシートは、振り返る項目を短文で示す「チェック項目」とその具体的な内容を示す「チェックのポイント」から構成される。3ヵ年にわたる「チェック項目」の合計は150項目(15グループ×10項目)である。分析では、まず「創る側の視点」と「観る側の視点」の回答数の現状を把握するために、「チェックのポイント」に書かれてある内容をもとに「チェック項目」を分類した。次に、5つのカテゴリ毎に同じ意味だと考えられる「チェックのポイント」を集計した。「チェックのポイント」に表されている文章が1つの「チェック項目」の中に複数ある場合、文章の意味を慎重に検討し、それぞれをカウントするようにした。その際、カテゴリの意味に属しないと考えられるものと、単数回答の「チェックのポイント」は大多数の学生の意識を反映していないと判断し、除外した。最後に、上記2つの集計結果をもとに学生が自らの作品発表を客観的に振り返るための自己評価チェック項目を選定した。なお、分析の客観性を高めるために、全ての作業は筆者を含む4名(残りの3名は共同研究者)の合議で行った。

3. 結 果

まず、5つのカテゴリ毎に学生が回答した「チェックのポイント」を同じ意味のまとまりに集計したものを表1に示す。一つ目の「コミュニケーション」カテゴリでは、自己主張に関する「自らの意見を言うことができたか」が10回答と最も多く、報告・連絡・相談に関する「全員が情報共有していたか」が7回答であった。次に、「皆と仲良くしたか」が6回答、「相手の意見を受け入れることができたか」が5回答、「相手の考えを理解しようとしたか」が3回答であった。

二つ目の「備品の使用」カテゴリでは、造形用品からCDラジカセ、スポットライトにいたるまでの備品全般に関する「道具を正しく、丁寧に使用したか」が12回答と最多で、続いて「整理整頓や片づけを行ったか」が9回答、「使用時間を守ることができたか」が6回答、「貸出簿への記入を行ったか」「資源を有効利用

表1 カテゴリー別「チェックポイント」の集計結果

<コミュニケーション>

	チェックのポイント	項目数
1	自らの意見を言うことができたか	10
2	全員が情報を共有していたか	7
3	皆と仲良くしたか	6
4	相手の意見を受け入れることができたか	5
5	相手の考えを理解しようとしたか	3

<備品の使用>

	チェックのポイント	項目数
1	道具を正しく、丁寧に使用したか	12
2	整理整頓や片づけを行ったか	9
3	使用時間を守ることができたか	6
4	貸出簿への記入を行ったか	5
5	資源を有効利用したか	5
6	他のチームと貸し借りができたか	2

<施設の使用>

	チェックのポイント	項目数
1	掃除や片づけを行ったか	8
2	使用時間を守ることができたか	8
3	使用後の原状復帰をしたか	7
4	場所を譲り合って使用したか	6
5	使用上のルールを守ることができたか	2
6	施設使用の計画を他のグループと話し合えたか	2

<制作上の工夫>

	チェックのポイント	項目数
1	各分野（脚本・音楽・身体表現・造形）の工夫を行ったか	10
2	資源を有効利用したか	6
3	皆で相談し、協力して制作したか	5
4	観る人に合わせた演出ができたか	4
5	最後まで妥協せずに制作したか	3
6	これまでに習得した表現技術を活用したか	2

<その他>

	チェックのポイント	項目数
1	各分野（脚本・音楽・身体表現・造形）の工夫を行ったか	8
2	役になりきることができたか	7
3	観る人に合わせた演出ができたか	4
4	皆と仲良くしたか	4
5	本番を思いきり楽しめたか	2
6	お互いの演技を客観的に評価したか	2

したか」がそれぞれ5回答、「他のチームと貸し借りができたか」が2回答であった。

三つ目の「施設の使用」カテゴリでは、保育棟の各部屋や本館会場など、練習で使用する全ての部屋に関する「掃除や片づけを行ったか」「使用時間を守ることができたか」がそれぞれ8回答と最も多く、「使用後の原状復帰をしたか」が7回答、「場所を譲り合って使用したか」が6回答と続いた。また、「使用上のルールを守ることができたか」「施設使用の計画を他のグループと話し合えたか」がそれぞれ2回答あった。

四つ目の「制作上の工夫」カテゴリでは、BGMや効果音、ダンス、背景となる壁面など表現分野の工夫に関する「各分野（脚本・音楽・身体表現・造形）の工夫を行ったか」が最多の10回答、「資源を有効利用したか」が6回答、「皆で相談し、協力して制作したか」が5回答、「観る人に合わせた演出ができたか」が4回答、「最後まで妥協せずに制作したか」が3回答、「これまでに習得した表現技術を活用したか」が2回答と続いた。

五つ目の「その他」のカテゴリでは、四つ目のカテゴリと同様、「各分野（脚本・音楽・身体表現・造形）の工夫を行ったか」が8回答と最も多かった。次に、「役になりきることができたか」が7回答、「観る人に合わせた演出ができたか」「皆と仲良くしたか」がそれぞれ4回答、「本番を思いきり楽しめたか」「お互いの演技を客観的に評価したか」がそれぞれ2回答と続いた。

次に、それらを集計・分析し、「創る側の視点」と「観る側の視点」に分類した回答数を表2に示す。3カ年150の「チェック項目」について、「創る側の視点」が119項目（79.3%）と最多で、どちらの視点も有すると思われる「創る・観る側の視点」が23項目（15.3%）、「観る側の視点」はわずか8項目（5.4%）であった。

表2 視点別チェック項目数

視点	チェック項目数
創る側の視点	119 (79.3%)
観る側の視点	8 (5.4%)
創る・観る側の視点	23 (15.3%)
合計	150 (100%)

4. 考 察

本研究の目的は、過去3ヵ年(平成21年度~23年度)の学生の回答を「創る側の視点」「観る側の視点」といった視点別に分類して分析を加え、学生が回答した「チェックのポイント」を同じ意味のまとまりに集計した上で、学生が自らの作品発表を客観的に振り返るための自己評価チェック項目を選定することである。

1) 視点別チェック項目について

表2に示されているとおり、「創る側の視点」の「チェック項目」が全体の79.3%と圧倒的に多く、「観る側の視点」の「チェック項目」は「創る・観る側の視点」のそれを加えても全体の20.7%と非常に少ない、という先述の伊藤らと同様の結果となった。この結果について、学生の回答が「創る側の視点」に傾いてしまう要因は2つあると考えられる。1つ目は、初めてオペレッタを制作することによる、制作経験やノウハウの不足が挙げられる。仮に脚本の作成、演技、衣装や大道具、小道具の製作などを行う場合、まずその物語や役、時代設定を自らがどう理解し、表現するかという「創る側の視点」からオペレッタ制作は進められる。つまり、「観る側の視点」はその作成したものを叩き台として加えられ、また新しく作成していく…この繰り返しの中でオペレッタ制作は深化していくと考えられる。しかし、グループ内の役割(脚本担当、音楽担当など)や配役など、一人の学生の担当が多岐に渡る現状を考えると、一つの表現をじっくりと検討し、再構築していくという繰り返し作業には限界があると言える。そのため、学生は一つ一つの制作の段階で「観る側の視点」を若干考慮しつつも、自らのイメージを具体的にどう表現するかという段階に留まっている可能性が示唆される。もう1つの要因は、教員が設定した5つのカテゴリのうち、3つのカテゴリ(コミュニケーション・備品の使用・施設の使用)が「創る側の視点」に偏っている点が挙げられる。制作過程において、各教員は「観る側の視点」を中心に指導を行い、学生も効果的にその指導を取り入れているものの、発表会後の自己評価の段階で「創る側の視点」のカテゴリが多いため、結果として偏った回答になっていると考えられる。

2) 自己評価チェック項目の選定

以上の分析と表1をもとに、学生が自らの作品発表を客観的に振り返るための自己評価チェック項目を選定していく。まず、「コミュニケーション」カテゴリに

ついて、1つ目は、学生の回答の中で最も多かった「自らの意見を言うことができたか」と「相手の意見を受け入れることができたか」(4番目回答)を組み合わせ、「双方向の話し合い」というチェック項目とした。次のカテゴリは「情報共有」とし、報告・連絡・相談を軸とした「全員が情報を共有していたか」(2番目回答)という内容とした。3つ目のチェック項目について、学生のモチベーションや能力には個々に違いがあり、一つの目標に向かって協同していく過程で学生同士の思いのずれや行き違いが多く起こる。必然的にその時々で相手の考えを理解しようとしたり、他者を理解するための円滑な方法を探したりする必要が生じるため、「他者理解」というチェック項目を設定した。

次に、「備品の使用」カテゴリと「施設の使用」カテゴリについて、「チェックのポイント」を概観すると、両方で「使用時間を守ることができたか」が共通していたことをはじめ、多くの回答が似通った内容(前者の「整理整頓や片付けを行ったか」と後者の「掃除や片付けを行ったか」、前者の「他のチームと貸し借りができたか」と後者の「場所を譲り合って使用したか」など)になっているため、これらのカテゴリを統合しても差し支えないと判断し、「備品・施設の使用」カテゴリに変更した。その上で、1つ目に「資源を有効利用したか」(「備品の使用」4番目回答)と「道具を正しく、丁寧に使用したか」(「備品の使用」1番目回答)を組み合わせ、「正しい使用」というチェック項目を設定した。2つ目は、使用上のルールやマナーに関する「決まりごとの順守」というチェック項目とした。最後に、備品や施設を使用する際の他のグループとの物理的な調整について、「他のチームと貸し借りができたか」(「備品の使用」6番目回答)と「施設使用の計画を他のグループと話し合えたか」(「施設の使用」6番目回答)を組み合わせ、チェック項目を「利用時の他者への配慮」とした。

次の「制作上の工夫」カテゴリと「その他」カテゴリには、共通の「チェックのポイント」(「各分野(脚本・音楽・身体表現・造形)の工夫を行ったか」「観る人に合わせた演出ができたか」)もあれば、そうではないものも混在しているため、オペレッタ制作上の工夫に関連するもの(「制作上の工夫」カテゴリ)とともに、オペレッタ制作を通して自分自身を振り返り、その善し悪しを考える「省察」カテゴリを新設した。また、両カテゴリには(1)での分析を踏まえ、「観る側の視点」に関連するチェック項目が入るように選定した。

表3 選定した自己評価チェック項目

	No.	チェック項目	チェックのポイント	備考
コミュニケーション	1	双方向の話し合い	<ul style="list-style-type: none"> 自らの意見を言うことができたか 他者の意見を受け入れることができたか 	
	2	情報共有	<ul style="list-style-type: none"> 皆で一つの情報を共有することができたか 	
	3	他者理解	<ul style="list-style-type: none"> 他者を理解するための円滑な方法を模索したか 他者を理解することができたか 	
備品・施設の使用	4	正しい使用	<ul style="list-style-type: none"> 資源を有効利用したか 丁寧に使用することができたか 	
	5	決まりごとの順守	<ul style="list-style-type: none"> 貸し借りの記録、時間内の使用を行ったか 整理整頓や片付けを行ったか 	
	6	利用時の他者への配慮	<ul style="list-style-type: none"> 備品や施設使用の計画を他のグループと話し合えたか 場所を譲り合ったり、共有したりすることができたか 	
制作上の工夫	7	効果的な指導の取り入れ	<ul style="list-style-type: none"> 指導を自分なりに取り入れることができたか 最後までより良いものを作ろうとしたか 	
	8	テーマの表現	<ul style="list-style-type: none"> 対象に応じたテーマの伝え方を工夫したか 観る人に合わせた演出ができたか 	観る側の視点
	9	表現分野の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 各分野（脚本・音楽・身体表現・造形）の工夫を行ったか 最後まで創造的に工夫し続けたか 	観る側の視点
省察	10	既有知識の活用	<ul style="list-style-type: none"> これまでに習得した表現技術を活用したか 	
	11	客観的視点の保持	<ul style="list-style-type: none"> 自らの取り組みを客観的に振り返ることができたか 他者の演技や作品を客観的に評価することができたか 	観る側の視点
	12	自己表現	<ul style="list-style-type: none"> オペレッタ制作を通して、自らを表現することができたか 表現を楽しむことができたか 	

「制作上の工夫」カテゴリには、教員からの指導を自分なりに取り入れ、「最後まで妥協せずに制作したか」（「制作上の工夫」5番目回答）に関する「効果的な指導の取り入れ」というチェック項目と対象に応じたテーマの伝え方を考え、「観る人に合わせた演出ができたか」（「制作上の工夫」4番目回答）が含まれる「テーマの表現」というチェック項目を設定した。また、「制作上の工夫」と「その他」カテゴリで最も多かった回答である「各分野（脚本・音楽・身体表現・造形）の工夫を行ったか」を踏まえ、「表現分野の工夫」を3つ目のチェック項目とした。

新設の「省察」カテゴリには、「これまでに習得した表現技術を活用したか」（「制作上の工夫」6番目回答）に関する「既有知識の活用」チェック項目と、自らの取り組みの振り返りや「お互いの演技を客観的に評価したか」（「その他」6番目回答）に関する「客観的視点の保持」チェック項目を設定した。3つ目のチェック項目は、保育所保育指針及び幼稚園教育要領の領域「表現」の内容の中に、「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさ

を味わう」^{2,3)}とあること、また、江原ら⁴⁾は学生がオペレッタ制作を通して「何よりも自己の表現をどれだけ多く楽しむことができるかが、作品づくりに影響を与えていく」と指摘していることを鑑み、オペレッタ制作を通して自らを表現すること、また、表現そのものを楽しむことに関する「自己表現」とした。

以上をまとめると、表3のとおりとなる。

5. 今後の課題

自己評価チェック項目の選定にあたり、今後検討すべき課題を2点挙げる。1点目は、選定した項目の妥当性を検討し、必要に応じて更新することである。選定した一つ一つの項目も含め、全体的に学生の客観的な振り返りが可能かどうかは今後も検証を続けていく必要がある。まずは、今回新しく作成した自己評価チェックシートが妥当なものかどうかを確認するために、オペレッタ制作を経験した1～5期生へ調査アンケートを行いたい。2点目は、図1に示すとおり、自己評価チェックシートから得られる視点をFD（Faculty Development）の分野に活用することであ

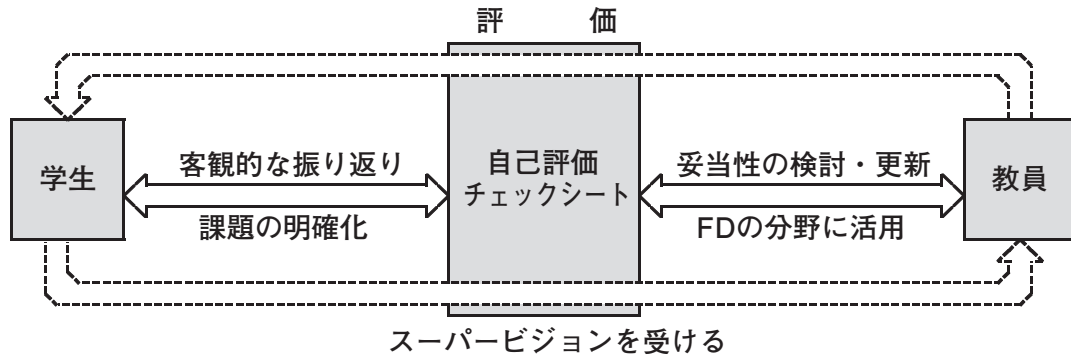


図1 自己評価チェックシートの役割

る。学生のオペレッタ制作の過程を自己評価チェックシートを通して評価することにより、学生自身の振り返りと教員による評価のズレが生じることが予測される。“どの項目に差があり、その原因は何なのか”について分析を重ねていく中で、授業目標や達成課題の再確認、授業内容が授業方法の改善などに活かしていきたいと考えている。

6. 付 記

本論文は、第65回日本保育学会（ポスター発表）で受けた指導、助言をもとに、加筆、修正したものである。

7. 文 献

- 1) 伊藤智里, 青井則子, 秋政邦江, 尾崎公彦: オペレッタ授業における学習者自身による自己評価—客観的視点を養う評価シートの作成—, 川崎医療短期大学紀要30: 77—82, 2010.
- 2) 厚生労働省: 保育所保育指針
- 3) 文部科学省: 幼稚園教育要領
- 4) 江原千恵, 林 和美, 魚住美智子: オペレッタ創作活動における表現力の育成と保育への応用Ⅴ—作品の創作および発表に対する他者評価—, 大阪城南女子短期大学研究紀要44: A13—A26, 2010.